

東日本大震災被災地の学校で実施した Communicational Teaching Project の有効性

山崎 友子

1. 研究の背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、岩手県沿岸部は巨大津波により甚大な被害を受けた。教職員・児童生徒・地域住民の的確な判断と迅速な行動により、岩手県内の小中学校の学校管理下での犠牲者は皆無であったが、沿岸部の居住地域・商業地域・漁業等の生産活動の場が壊滅的な被害を受け、児童生徒は、家屋の損壊・家族の死傷・保護者の就業の場の喪失等の深刻な状況に置かれた。そのような中、日本国内のみならず、世界各国からの支援が届き、被災地の児童生徒は未だかつてなかったほど、外国を身近に感じるようになった。海外での研修・キャンプ等への招待も少なくなく、このような機会の活用を可能とする英語スキルの育成が必要となり、物怖じしないで英語を使ってコミュニケーションを図ろうとすること、自分の置かれている状況・感情・意見を英語で発信することができる力の育成が求められるようになった。さらに、現在の中学生・高校生は今後被災地の復興を担う中心的な人材であり、地域の特色の理解、地域へ積極的に関わる態度も併せて育むことが求められている。従来の英語指導方法だけでは不十分であり、被災地の学校では新たな指導方法が必要となった。

本研究では、初級者の情報伝達能力養成のための教授法としてインドで提唱された Communicational Teaching Project に着目し、その要素を取り入れた連携授業を被災地の高校で実施し、その有効性を語彙学習の面から検討する。

2. Communicational Teaching Project (コミュニケーション・ティーチング・プロジェクト:CTP) と理論的背景

伝統的な英語教育法では、英語の構造・形式を修得することを中心的な課題として重視し、「言語能力」の養成を目指してきた。言語能力が身につくとコミュニケーションが可能となるとの想定がある。しかし、英語の構造・形式を学んでも英語でのコミュニケーションは容易ではないという現実があり、社会言語学の立場から、コミュニケーション能力とは、言語を正しく使用する能力だけでなく、場面に適切な言語使用ができることである (Hymes 1972) との研究結果も提言され、英語教育においてコミュニケーションを可能にする「情報伝達能力」の育成の重要性が注目されるようになった。

コミュニケーション能力の養成を志向する指導方法の中に Communicative Language Teaching (CLT) がある。「情報伝達能力」の養成に重点を置いた指導方法であり、information gap / choice / feedback 等の指導方法を用いて、「情報伝達能力」と「言語能力」の両者の修得を目指そうとしている(米山 2010; Larsen-Freeman 2002)。英語運用能力養成を主たる目的とする英語教育においては、CLT が標準的な教授法となっている。日本でも 2002 年改訂の学習指導要領で文部科学省が「実践的コミュニケーション能力」を目標に設定したが、検定教科書は、従来の「言語能力」を構成する言語形式によるシラバスが主流であり、CLT の実施に用いられる概念・機能シラバスは少なく、CLT が日本の学校教育における英語の標準的な教授法とはいえない。

言語使用の適切性までも求める CLT は特に初級の学習者には非現実的であるとし、インド南部バンガローア (Bangalore) では、地域の現状に合致した方法としてコミュニケーションを通して「言語能力」を高める教授法が Communicational Teaching Project として Prabhu 等から提唱され、試みられた。この教授法の特徴は米山 (2010) によると、以下の二点にまとめることができる。

- ① 学習者の要求に合った、しかも彼らが解決できるような現実的な課題を豊富に準備し、教師の適切な準備作業の中で意味のある意味交渉を行う。その後、学習者自身が学習に取り組み、その解決のために様々な言語運用が行われる。そのことが結局は彼らの言語能力を高める有効な方法となる。
- ② 学習者が興味を示し、取り組むことができる課題を中心とした教材編成を行う。

(米山 2010 : 308)

このような CTP の目的・特質を考えると、本研究の対象とする学習者が英語に苦手意識を持つ初級者レベルであること、被災という異常事態にあり地域に対する関心が高まっており、かつ地域理解の必要性があり、全国標準として設けられた教科書では対応できない地域の特質を扱う教材を活かすことができること、現実的な課題が準備可能なこと等から、CTP は本研究に最も適切な教授法と考えられた。

3. 方法

被災地である岩手県宮古市の県立高校(普通科、男女共学) ⁱⁱで 2 年生対象の高

大連携授業として 2012 年 10 月～12 月に、各月 1 回実施。外国の人に物怖じしないて話しかけること、英語を使ってみようとするこ、地域の特徴を知りそれに誇りを持ち英語で発信しようとするこ、と態度面に重点を置いて実施した。

表1 対象の学習者 (高校2年生)

男	女	計
14名	8名	22名

高校所在地は、わかめ・あわび・うに等の漁業が盛んな地域であることから、漁業をテーマに選んだ。初級者というレベルの高校生であることを考慮し、漁業の内容については、社会科の専門家³⁾に授業を依頼し、その後、英語の授業を続けて行うことにした。学習者が興味を持って取り組むことができる課題として、外国人との英語での名刺交換と地域の海産物を使った英語のレシピ作りを選び、プロジェクトのゴールとして、実際に英語を使用する場になるよう「インターナショナル・レシピ・フェア (International Recipe Fair)」を設定した。また、心理的に安心して英語に取り組むことができ、意味交渉の機会が増えるよう、グループ・ワークを多く取り入れ、かつ、教える側も大学生と留学生の複数グループによるものとした。

CTP の実践をとおして授業者となる学生が、コミュニケーションな授業技術を身につけていくことも隠された目的であり、最初の授業では大学教員である筆者が第一授業者 (T1) となったが、二回目以降は大学院生が T1 となり、教案も作成し筆者が点検、教材作りの発案と学部学生の指導も大学院生が行った。学生の指導技術の向上については別途論じ、本稿では取り上げないこととする。

4. 授業案

第3回に International Recipe Fair を設定し (2 時間授業)、第1回・第2回 (各1時間授業) はその Fair で英語を用いてやり取りができるようにということを目指して授業を構成した。例えば、あわび・うに等の海産物の英語での言ひ方やそれらを組み合わせた料理名などを学ぶ活動があった。

第3回の授業のテーマは「自分達が作ったレシピを留学生の先生達に紹介しよう！」であり、米国・アイスランド・中国・ロシアからの留学生6名の協力を求めた。授業過程は下記のとおりである。

表2 第3回授業の授業過程

- 1) 留学生との出会い
 - ① 名刺作り
 - ② 留学生の自己紹介
 - ③ 名刺交換活動
- 2) 復習
 - ① 前時に学んだ食材の発音練習
 - ② 食材名を使ったポーカルタ¹⁾活動を留学生とともに行う
- 3) Active Cooking
 - ① 日本人学生と留学生が一緒になって、ある料理の手順を小道具やアクションを使いながら英語でデモンストレーションをする
 - ② 高校生も一緒に、それぞれのアクションに合わせて英語で料理手順を言う
- 4) International Recipe Fair
 - ① 留学生は教室内に散らばり、高校生はグループごとに1人の留学生のところに行く。高校生は自分達のオリジナルレシピを説明し、レシピ・カードを留学生に手渡す。留学生も自分の国の名物料理のレシピを説明し、レシピ・カードを高校生に渡す
 - ② 時間内にできるだけ多くの留学生とレシピ・カードを交換する
- 5) まとめ(1)
 - ① 交換したレシピをクラスに発表
 - ② Hangman を使って、ある料理名を当てる
 - ③ 発表したレシピで使った英語と一致する英語を板書から見つける
- 6) まとめ(2)
 - ① Word List に記入
 - ② 振り返りシートに記入
 - ③ あいさつ

授業構想にあたり特に留意したのは、英語を使うことの必然性を高校生が感じるようにすること、理解可能な input となるよう picture card の作成やデモンストレーションを工夫すること、参加型の活動を入れ実際に英語を使う機会を多く作ることの3点であった。

語彙については、地域の特産物や名物料理を取り扱った (abalone, urchin, seaweed, wakame-rice, etc.) 他、調理手順を「食材の準備⇒切る・洗うなどの予

備調理⇒焼く・煮るなどの調理⇒塩コショウなどの味付け」と4段階に分節し、それぞれの段階での使用が予想される語彙を事前に留学生とともに検討し、語彙の表を作り、黒板に掲示した。

5. 結果 (1)

英語に対して苦手意識を持っていた高校生は、新しい授業をどのように受け止めただろうか。振り返りシートにより授業の感想を4段階のライカート・スケールと自由記述で記入してもらった。第一回の4段階評価を求めた項目とその集計結果は下記のとおりであった。

表3 第一回振り返りシート【授業について】数値で答える項目

- 1) 今日の英語の授業は楽しかった
- 2) 教師の英語での指示は分かりやすかった
- 3) 食材を英語で言えるようになった
- 4) 今日学習した英語を使いたい
- 5) 一生懸命授業に参加した
- 6) 次回の授業が楽しみである

評価

- 4 : 大変そう思う 3 : 少しそう思う
 2 : あまりそう思わない 1 : 全くそう思わない

表4 第一回振り返りシート【授業について】の集計結果 22名

項目	1)	2)	3)	4)	5)	6)
平均	3.9	3.6	3.6	3.5	3.8	3.7

1)の楽しかったかどうかを問う質問には、19名が「4」、3名が「3」の回答で、それ以下の回答はなく、新しいタイプの授業が学習者には歓迎されたと言える。次いで平均値が高かったのが5)一生懸命授業に参加した、であるところから、「楽しい」の中身が、英語をある程度理解でき、英語を使おうとする態度で臨んだことが充実感につながったと考えられた。次の授業を7名が「3」、15名が「4」と肯定的に楽しみに待つとの回答であり、否定的な回答は皆無であったことから、このCLTという試みで構想していることが学習者に受け入れられたと考えられる。

第三回の授業の振り返りシートの集計結果を見てみよう・

表5 第三回振り返りシート【授業について】数値で答える項目

- 1) ALT（留学生）の先生との名刺交換で自己紹介がうまくできた
- 2) ALTの先生とのポーカルタは楽しかった
- 3) レシピの交換ではグループで協力して、ALTの先生に伝えることができた
- 4) レシピの交換では自分の役割を持って活動できた
- 5) ALTの先生達が英語で話すことは何となくわかった
- 6) 自分の英語が少し上達したと思う
- 7) 外国の人たちと交流することは楽しいと思った

表6 第三回振り返りシート【授業について】の集計結果 22名

項目	1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)
平均	3.2	3.9	3.7	3.6	3.4	3.2	3.9

最も平均値が高いのは2)と7)である。外国の人たちとの交流を物怖じするどころか「楽しい」と感じている。ポーカルタというゲーム活動も同じく平均値が高く、このような交流活動が有効であることが分かる。一方、平均値が低いのは1)と6)の英語を使うことに対する自己評価である。しかし、平均値は「3」を超えており、否定的な回答にあたる「2」の回答は、1)に3名、6)に2名であり、全体としては、英語の学習そのものも進んだと言えよう。

学習者の英語理解が進むようにと留意した指導方法は有効であったのであろうか。「指導方法について」の質問事項とその回答結果を見てみよう。

表7 第三回振り返りシート【指導方法について】の質問項目

- 1) 大学生のデモンストレーションは名刺交換やレシピ交換の時に役立った
- 2) 黒板に貼られた表などは自分の活動に役立った
- 3) 活動中の大学生のサポートは自分の活動に役立った

表8 第三回振り返りシート【指導方法について】の集計結果 22名

項目	1)	2)	3)
平均	4.0	4.0	3.9

1)と2)には、「3」の回答が各1名、3)には3名と、どれも役立ったとする回答が極めて高かった。初級者に対する英語の input を理解可能にしようとの工夫は効果があることが分かった。

6. 結果 (2)

外国の人との交流を楽しいと感じ、英語も使おうと努力している授業の中で、語彙はどのように学習されているだろうか。第三回授業のまとめにおいて、“Word List” のワークシートを配布した。授業で耳にしたり見たり、自分自身が使ったりした単語・語句・文を書きなさいという指示で、30 個分のスペースを設けた。スペリングミスは気にしないようにとも付け加え、ワークシートの指示はすべて英語で書いた。その結果、約 7 割の学習者が 30 個すべて記入した。

表 9 Word List への記入個数

個数	30	26	23	20	19	15		平均個数	SD
人数	15	1	3	1	1	1		27.2	4.87

最も記入数の少なかった学習者は、garlic などの食材の他、留学生が紹介した料理 Borchi (ボルシチ) やまとめの段階で chorus reading の “We love hamburgers” を書いている。‘slice’を ‘surais’、‘sea urchin’を ‘seeachen’ と書いているところから、スペリングに自信がなかったことが記入が少ないことの一因であると考えられる。

記入された英語を分類すると次のようになる。

- 1)食材：①自分のレシピで使ったもの 例) yeast
②授業で使ったもの 例) salmon
- 2)調理方法：①動詞のみ 例) steam
②フレーズで 例) boil seaweed and cut it into chunks
- 3)授業者からの指示：例) Put your hand on your head.
- 4)授業者とのやりとり：例) Thank you. / I'll be back.
- 5)Chorus reading で使った英語：例) We love hamburgers!
- 6)その他：例) POKARUTA

レシピに関する語句は、授業で使用したもの以外に、例えば、‘Pour Mate tea in the mixed rice and put chunks of rice cracker into it’ など自分で調べたもので長いものも挙げられていて、熱心に学習したことが伺われた。

また、授業者の使う語句が記憶に留まっていることも分かった。“I'll give you five minutes” “Return to your seat” など予想以上に多くの指示の言葉が多く、の学習者から挙げられた。さらに、留学生や日本人学生とのやり取りの言葉や学生の名前なども挙げられており、意味のあるコミュニケーションとしてのやり取りから言葉が学習されることが分かる。

7. 考察と結語

学習者の満足度が高くかつ英語学習が深まっている結果は、日頃外国人との接触の少ない環境にある高校生にとり、CTP が学習の刺激剤となったことを示している。しかし、英語を使用しての外国人との接触は、英語が不得意な高校生にとり心理的に不安を掻き立てるものでもあるので、このような機会を学習の刺激剤とすることができたのは、CTP の考え方に基づいた授業構想の利点が効果的に活用されたからと言えよう。

被災地の高校生にとり、地域の特産品を使ったトピックは、地域への理解を深めながら英語学習の必要性を感じさせることができる。特産の海産物を使ったレシピの作成という教科書にはない教材作成は、学習者が解決できる現実的な課題であり、意味のあるコミュニケーション場面を作り出すのに有効であった。また、留学生とのレシピ交換という実際に英語を使用する場面は、事前の準備によりゴールとして到達可能となり、多くの学びを引き出す機会となった。留学生が登場することにより、学習者は意味のある相互交渉(interaction)を通して与えられた英語(input)の意味を理解し、使用できる(output)という理論通りの英語学習環境を作り出すことができ、CTP が有効となった。

学習者の英語語彙への関心が、教材で示された英語だけでなく、それをを用いる場面での言葉のやり取りにも向けられていることから、コミュニケーション活動を通して「言語能力」を高めるといふ CTP の理念が実際に機能していることが分かる。指導方法として、Classroom English や interaction を増やす授業者の発話、学習者間での英語使用を促す活動の工夫、グループワークの導入等が CTP の効果を高めると考えられる。このような工夫があれば、授業という文脈の中で意味が理解されやすく、語彙だけでなく統語的な理解を進める基盤ともなる。コミュニケーション活動において意味を重視しながら言語の形式・構造にもより一層注意を向ける指導方法を深化させていくことができ、CTP の可能性がさらに高まる。

本研究では、大学生・大学院生の指導技術の向上という意味もあり、指導する側も複数での TT(Team-teaching)となった。本研究の結果を参考に、今後授業者

間の interaction や classroom English の工夫を図り、CTP をさらに有意義なものへと深化させていきたい。

参考資料

- 国立教育政策研究所監修 (2012) 『震災からの教育復興—岩手県宮古市の記録—』
東京：悠光堂
- 米山朝二 (2010) 『英語教育 実践から理論へ』第4版、東京：松柏社
- Hymes, Dell. (1971). 'Competence and performance in linguistic theory,' in R. Huxley and E. Ingram (eds.) 'Language Acquisition Models and Methods.' London: Academic Press.
- Larsen-Freeman, Dian. (2002). "Techniques and Principles in Language Teaching" fifth edition. Oxford: OUP.
- Prabhu, N. S. (1987). Second Language Pedagogy." Oxford: OUP.

謝辞

連携授業実践の機会を与えていただいた県立高校の先生方・生徒のみなさん、授業に参加した岩手大学教育学部学生・教育学研究科院生・岩手大学留学生のみなさん、そして、振り返りシートの集計に協力してくれた岩手大学学生の平賀健司君・三浦直生君に深く感謝します。

(岩手大学教育学部英語教育科)

ⁱ 『震災からの教育復興—岩手県宮古市の記録—』に被害と学校の対応・復旧の様子が詳しく記述してある。

ⁱⁱ 学校の校舎・校庭は津波による浸水を免れているが、学区の中心地は壊滅的な被害を受け、商店は流失し鉄道は不通となり、多くは高台の仮設住宅や市内の浸水していないアパート等からバスで通学。

ⁱⁱⁱ 岩手大学前教授山崎憲治氏（地理学）に依頼し、「三陸沿岸の漁業の特徴」「食料問題と漁業」というテーマで社会科の授業を行ってもらった。

^{iv} 2回目以降の授業でT1を務めた大学院生の三浦直生君の考案によるもので、ポーカーとカルタの要素を組み合わせたもの。カルタのように、読み手の指示に従って取り札を取っていき、ポーカーのように手元の札の組み合わせにより得点が決まる。